
双鬼伝

紅蓮藍花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双鬼伝

【Nコード】

N3227J

【作者名】

紅蓮藍花

【あらすじ】

双子の兄弟が異世界に飛ばされた先でのお話です。まあ・・・もれなく主人公最強？設定にする予定です。ベターな内容ですが暇つぶしにでもどうぞ。（暇つぶしにもならないかもしれませんが・・・）

序章にもならない序章

よくある話だと思う。特に小説やアニメの世界では……。

異世界に飛ばされるなんてな、しかも、白昼堂々なんて何の悪夢だこれ？

思わず、アメリカ人だったら「OH!! MY GOOD!!」なんて叫んでるところだ？きつと、多分？

よくアニメなんかだとここで美人なお姉さんが出てきて

「世界を救ってください!!」
とか敵ついおっさんが出てきて

「お前は選ばれし者だ!!」
みたいなベターな展開があるんだけどなあ……。

一向にその気配は無し、しかも何でかなあ？本当に何でかなあ？

森の中で誰もいないところに俺は何故いるんだ？

そして極めつけは、隣に仏頂面で愛想笑いも出来無そうな男がいる。
今だったら素で泣けるぜ？俺……。

俺の人生は最悪だ……。

序章にもならない序章（後書き）

誤字脱字沢山あるので気がついた方は連絡いただけると泣いて喜びます。

序章〈現代編〉その？（前書き）

話が始まらないんでやきもきするかもしれませんが・・・。
気にせず読んでいただけると良いかな？と思います。

序章〜現代編〜その？

俺こと『神塚貴一』かみつかきいちは平凡な大学生だ。

いたって平凡、普通、パンピーだ。普通で万歳！！

大学生と言っても三流大学だから平凡なのは怪しいが、まあ平凡な部類に入るのだろう。

家庭もいたって平凡だ。祖父母に父親一人に母親一人は当たり前だが、あとは妹が一人

そして認めたくは無いのだが、本当に認めたくは無いのだが『辰巳』たつみと言う弟がいる。

俺は……。いやっ俺達は双子だ。

弟と言っても双子だからどっちが上で下かなんて考えたことが無いのだが。

まあ世間では必要だから形骸的に俺が兄である。

しかし双子と言ってもこうまでも似ていない双子も珍しいと思う。

「二卵性双生児」と言うところだ。

特に髪の毛の色が違う俺はアルビノ？と思われるほど髪が白い、たまに銀髪見たいなんていわれる事もあるが、色々と言われるがめんどくさいので白髪と言うことにしている。

逆に弟は典型的な日本人の髪で漆黑である。墨を溶かしたような髪で本当に真っ黒である。

俺の髪の毛が何故白いのかって？そんなもんは知らん！！

生まれたときから白いんであんまし深く考えたことも無いなあ。

次に家は平凡だ……。多分。

俺の家は剣術道場だ、剣道ではない一対多を目的とした技を現代に伝える剣術道場だ、立派とは言いがたい今にも崩れ落ちそうな道場だが、何故か全国から技を伝授してもらいたいだの、道場破りだのが多い不思議な剣術道場だ。

しかし、門下生は一人もいない……。

門下生がない理由？それは……。追々は話していこうか、話すと長く……。なる？

まあ自己紹介はこんなもんか。

他にもあるのだがそこら辺も追々とだなあ。

って俺はだれにはなしているんだ？

合コンからの帰りあまりにも暇すぎて思わず語ってしまったぜ。

時計を見たら22時を過ぎたところだった。まだ夏の名残が残る暖かい秋の夜だ。

「はぁ……。今日も合コンハズレかよ。」

って言うかあれは女か？いまにもはちきれそうな胸っていうから喜んでいったら、素手でりんごが割れそうと言うより砕け散りそうな腕でしかも、胸板が厚いというか暑苦しい女がなんているんだよ！！

しかも5人も！！なんだアレは！！！！

まるで動物園じゃないか！！しかも個室の居酒屋でなんてありえねえええ！！！！

しかも、「あたし彼氏いないんだあ〜」。といいながら太もも触るなあ！！！！

思わず！！！！

「俺食われる！！！！！？？？？？」

まじで思ったよ貞操の危機感じちゃったよ！！！！
って彼氏探しじゃなくて餌探しじゃないのか？なんていう感じの残念な本当に残念な合コンだったよ。

自慢じゃないが俺は顔が整っている方だと思う。

そんじょそこらのイケメンよりかはかっこいいとは思っただが、彼女無し付き合っただ経験も無い。

妹に言わせると

「貴兄は二枚目ってよりは三枚目かな？いやっ二枚目になれそうだなれない三枚目？ちがうなあ~~~~？二枚目半？見たいな感じかな？」

「はぁ……。マジで泣きたい」

背中に哀愁を背負いながら帰っていると、いま一番会いたくない人物に会ってしまった。

「……むっ。」

と言いながら片手をあげて挨拶をする。

万年仏頂面で愛想の欠片も無い弟辰巳がそこにいた。

序章へ現代編へその？（後書き）

誤字脱字カモーンです。

泣いて喜びます。

序章 〳 現代編 〳 その？ (前書き)

なかなか話が進みません難しいです。

暇つぶしにでも読んでいただけると幸いです。

序章〜現代編〜その？

「……………今日の稽古。」

「……………」

「……………」

「……………」

「だあつあああ！〜もつと詳しく話せよ！〜っていつか会話が短すぎなんだよ！〜！」

辰巳はいつもこんな感じだ。

他の家族とか友人とかと話す時は、

「おはようございます。親父殿」

「只今帰りました。母様」

とか、時代錯誤か？って言うくらい堅苦しい話し方をする。

しかし、俺と話す時は……………。

「……………おう。」

「……………むっ。」

見たいになる。何故だ！〜！

辰巳が言うには。

「お前には言わなくても解るだろうっ？〜」

・・・確かに。

辰巳と俺は双子だからなのかお互いが話したいことがなんとなくだ
が解ってしまっ。

・・・嫌な能力だ。本当に。

そんなこんなをしているうちに家についてしまった。

「はぁ・・・。稽古サボってまで合コン行ったのに何の収穫も無
しかよ。」

「合コン?・・・ふう。」

「はいはいそうだね〜。私は相変わらず遊んでばかりでサボっ
てばかりですよ。」

何と言うか辰巳は模範的な優等生である。

一流大学において、高校も一流だ。

そして、くそまじめに剣術の稽古も欠かさない。

一緒にいて嫌になるぜ、本当に厄介な兄弟を持つちまったぜ。

無言でいた辰巳がふっと聞いてきた。

「・・・何故だ?」

「ん?何故おれが稽古しないのかって?メンドイからだよ!!楽し
くも無いことに時間が割けるかよ。」

「人生一回きりだ、これから先は大学卒業して仕事しなくちゃならいんだし、遊ぶなら今だろ？だから俺は遊ぶ！」

「今しか遊べないだろ？そうは思わないか？」

「……むう。」

(確かになあ)

「だろ？だからだよ。まあ……。稽古サボっているのがわかったら親父とお袋に殺されるなあ……。爺さんは大丈夫だろうけど。」

親父とお袋は剣術道場の師範だ。

つとここで俺達の剣術の流派を紹介しよう。

『しんそうきでんりゅう 神想貴伝流』

というらしい。流派の始祖は平安時代の……。

なんだか眉唾ごときの話だが、由緒ある流派らしい。

俗に言う古流剣術の部類でもなく独自の流派で他の剣術とは一線を画しているらしい。

詳しいことは解らん……。

辰巳なら知っているかもしれんが聞く気にもならん。

そんなこんなでうちの道場には全国津々浦々か腕自慢の剣道家やら剣術家などが集まってくる。

手合わせなどはいいほうで時代錯誤な道場破り何ぞも来るときがある。

……っていうより結構か数がくる。

道場破りは気がついたときは病院にいることも珍しくは無い。
道場破りは一様に。

「……悪魔がいた。道場に悪魔が」

とうなされて自分を守るために記憶がなくなるほどだ。
どんだけなんだうちの道場は……。
と言うわけで親父とお袋は腕っ節は相当なもんだ。
その以上に祖父ことじいちゃんは妖怪じみている。

最近は オースを感じれる。

エダイマスターに見えなくもない……。

そんな流派だからこそ、稽古の量も半端ではない。
10時間素振りなんぞは軽い方で

一ヶ月何も持たずに冬の山に放り込まれて山籠りなど訳のわからない事もやらされた。

山から出ようとすると親父とお袋から容赦ない攻撃を受ける。
……良く生きていたなあ。

そんなことを考えている内に家についてしまった。

「はあ……。」

明日生きているかな？俺……。

序章へ現代編へその？（後書き）

誤字脱字ありましたらカモーンです。

序章へ現代編へその？（前書き）

やはりなかなか進まないですが気長に読んでいただけると幸いです。

序章〜現代編〜その？

なんだかんだやっているうちに家に着いてしまった。

今日の稽古サボった理由考えとかないと……。
死んでしまいかもしれん。

「ただいつ……。」

チャキツと硬質な音が俺の首筋から響いた。

「何処にいた？」

「何してたの貴一ちゃん？」

気がつくくと親父とお袋が刃引きしていない刀を俺の首筋にあてて聞いてきた。

「おうつ……。ぱ〜ぱ&ま〜まお揃いで……。」

「サボりか？サボりでは無いのなら理由があるのなら聞いてやらんこともないが。」

「サボりなら、今ならゆるい仕置きで済ますわよ？」

「……。」

「……合コンでサボりました。」

「そうか……。」

「明日から一週間、山籠りの修行だ。」

「今回はそれで勘弁してやる、次回は一ヶ月だ。」

「……了解。」

こんなときは素直に聞かないとお袋と親父から半殺しの目にあう。半殺しではなく死ぬ一歩手前がただしいか……。

「わかったら、早く夕飯のしたくをしる。」

「……了解。」

そうなのだうちの両親と言わず家族は家事をやる人間がない、お袋なんて刀の扱いは旨いくせに包丁となるとからっきしだ。

以前は、ばあさんが作っていたのだが体を悪くしてからは俺がなぜかするように……。

泣けてくるなあ、でも家事しているときが一番和むと言つか癒されるのは何故なんだろう……？

「……。」

凹む話は置いて。

「さてっと。今日は和食・洋食・中華どれでいく？」

「「中華で……！」

料理番組をみていた家族からいつせいに同じ言葉がでていた。

「あいよっ……！」

~~~~~1時間後~~~~~

「できたぞ……。」

「さあっ食べー!!」

「「「遅い!!!」」」

「あんましへたなもんは食べたかないだろ?んで少しばかり凝ったもんを作ってみたよ」

「まあ、適当に食べてくれ俺は外で食べてきたから。」

俺がそういつて部屋の戻ろうとすると親父から声をかけられた。

「明日はここを6時にはでる。いつもの用意をしときなさい。」

「辰巳、後片付けを頼んだぜ」

「……むづ。」

それだけ聞くと俺は明日の用意をしているうちに寝てしまっていた。

~~~~~閑話~~~~~

「相変わらず、辰巳と貴一の会話は不思議だ。」

「そうね、それでも意思の疎通が出来ているから不思議よね。」

「……むづ。」

「わが息子達ながら不思議よね。」

家族と言つか親でも俺らの会話は不思議に思つらしい、何故だ？

~~~~~終了~~~~~

んで早朝おきて俺達は山籠りに来ていた。

キイン。キインと刀が打ち合う音が山に響く。

もうかれこれ5時間は辰巳と打ち合いをしている。そろそろ腹が減つてきているところだ。

「よし、やめ！！！！」

「ここらで休憩を入れるか。」

「うい~~~~。」

「・・・了解です、親父殿」

「あ~~~~。熱い~~~~。」

長らく打ち合っていたせいで体中がぐつちよりだ。

「休憩と昼飯が終わり次第、拝み滝の上で稽古だ！！！」

「うへ~~~~い。」

「・・・承知。」

キイン、キインと刀を滝の上で演舞のように振り辰巳と打合う。

1時間ほどたったところだろうか？その瞬間に大きな地震があった。

その瞬間だ！！

ゴソツ、ゴソツと大きな地響き起きた瞬間。

俺と辰巳の足元が崩れた。その瞬間に俺の視界はブラックアウトした。

序章〜現代編〜その？（後書き）

次話から本格的な話が始まります。次話も読んでいただけると幸いです。

誤字脱字がありましたらカモーンです。  
よろしく願いいたします。

## 一章くっく(前書き)

さてさて始まりですが・・・。まだまだ話が膨らみませんのであ  
しからず。

一章　　？　　？

「……………」

ズキリとした頭の痛みで俺は目を覚ました。

「いてえ……………」

長時間気を失っていたせいか、体中がバキバキだ。

「え…………と。俺はどうしたんだっけ？」

頭がぼつとしている。つぎの瞬間俺は覚醒した。

「そつだ！！辰巳は？辰巳！！！！」

「……………むっ。」

隣には、いつもの仏頂面で辰巳がいた。

「ほ…………。怪我は無いか？」

「……………むう。」

「……………大丈夫そつだな。」

「それよりも、どうなったんだ？」

そうなのだ、俺達は稽古中に地震があつて、その瞬間足元が崩れたあと俺は記憶がなくなつたんだよな。

「むう、ここはいつもの森じゃない。」

「はあ？俺はそんなにも気を失ってたのか？家の裏の森か？」

「違う……。日本でもない。」

「はあ？……辰巳。頭大丈夫か？悪いものでも食べて熱でもあるのか？」

「そうではない！！！」

「……っ。」

辰巳がこんだけ感情をあらわにするのは早々無いことだ。いやっ、初めてか？

「周りを見てみる……。」

「ん？」

そのときほど俺は息を呑むという言葉と共に絶句と言つ言葉を体現した事は無い。

「……。」

「……。」

「……。」

「なあ。辰巳、青い果物って見たことある？」

「ない。」

「だよなあ……。」

「なあ。辰巳、ウサギに羽って生えてたっけ？」

「俺は見たことは無いな。」

「ん……。俺も無い。」

「っつか、どこどこだ？」

「わからん、皆目見当もつかん。」

「つていうより。太陽が三つもあるよ?」  
「そうだな」

ひとは頭の処理がおいつかなると訳のわからん行動に走るらしい。

「ね〜、辰巳これは夢だ夢だよ!! 夢だから!!! 俺は走るんだ〜!!」

といて走りだそうとした俺の頭に激痛が走った。

「ごぶっ!!! ってえな!!!」

「起きたか?」

「おっう!! 綺麗さっぱりな、思わず現実逃避してしまったぜ。」

「んじやま、気を取り直して、現状把握をしますか!!」

「辰巳!! 俺が目がめる前は どうしてた?」

「・・・む?」

「だ〜から。誰かいなかったのか? ときいてるんだよ!!」

「いやっ。人の気配はしなかったなと言うよりお前が目覚ますちよつと前に俺は目を覚ました。」

「時間的には1〜2分だな?」

「そうだ。」

「ん〜。持ち物はどうなってる?」

「そこにある。」

「おっ!! えつと俺のバックに刀が2本にそれと・・・なんじやこりゃ?」

「俺にもわからん。」

そうなのだ、なぜか家の道場の神棚に祭ってあるはずの二振り二組の刀がある。

「なんでこんなところにあるんだ？」  
「わからん。」

家場の神棚には代々「神想貴伝流」に伝わる刀がある。それが何故か俺達の目の前にある。

神事など余程のことが無い限り。持ち出されず、ひっそりとした道場の中にあつたはずだ。

白塗りの鞘に入っている刀。銘は「神鬼切」

由来は「神をきり、鬼を切ったとされる。眉唾だ……。」

黒塗りの鞘に入っている刀。銘は「神竜皇」

由来は「神なる龍皇の刀、訳がわからん。」

「親父が持ってきたのか？」

「いやっ……。」

「だよな。」

「親父は触るの嫌がるぐらいだったもんなあ」

この刀は持ち主を選ぶとか何とかいって、触れる人物、使える人物などがあるらしい。

親父はなんとか、触れることができ、使えもするが30分は使えないといっていた。

俺はあのおとき以外に親父があそこまで憔悴しきっているのは見たことが無い。

んでも俺達はあるまじそついうの気にならないんだけどな。

つか、普通の刀よりもじっくりする感じがする、っていうより手になじむ感じか？

俺は神鬼切が使用でき、辰巳は神竜皇を使用できる感じだ。

何故だかは知らん！！

「んんんん。」

俺は頭の中で現状整理をしていた。

我ながらおかしい結論ではあるが、ここは異世界ではないのか？  
んなわけねえか。

よくアニメなんかだとここで美人なお姉さんが出てきて

「世界を救ってください！！」

とか敵ついおっさんが出てきて

「お前は選ばれし者だ！！」

みたいなベターな展開があるんだけどなあ……。

それも一向にないし、人の気配も無い。

「辰巳、ぼつとしても時間の無駄だから歩くか。」

「……おうつ。」

俺達は稽古で使用している真剣と

俺が「神鬼切」を辰巳が「神竜皇」を持ち行くあてもなく歩き始めた。

~~~~~1時間後~~~~~

「なんもないな。」

「……むう。」

~~~~~2時間後~~~~~

「……なんもねえ。」

「……おう。」

「……か、こんなにも歩っているのになんもないのはおかしくないか？」

「そうだな・・・。」

かれこれ20kmは歩いている。いくら平坦な森だといってもこども何もないと精神的に疲れてくるのが現状だ。しかし、歩きながらも俺達は常に気を張って周囲を見ている。見れば見るほどここは日本ではない、さらには地球であるのかでさえも怪しい。あきらかに異世界だ。

だって、青い果物に、羽が生えたウサギはかわいい方で触ったら爆発した果物、体中がべとべとに・・・。

触った瞬間しゃべるようになった果物・・・。

うん！！全力で見なかったことにしよう！！それがいい！！

それを見た辰巳は一言。

「・・・それだけ？」

こくりと辰巳はうなづく。

「はあ・・・。」

自然とため息が出てしまった。

「辰巳！！」

「んん？」

「少し話さないか？現状把握がしたい。」

「むっ、了解」

「いきなりだが、ここは異世界と呼ばれるところではないかな？」  
と思うのだがどう？」

「そうかもしれない・・・。」

「だよな。日本でもないし地球でもないし何で俺達がここにいるんだ？」

「しらんな。」

「だよな。」

「……まっいいや。取りあえず人を探して情報収集だ。」  
「……人がいればな。」ボソツと辰巳はつぶやいたが。  
そのとき俺は聞こえていなかった。

そのままなんとなく歩いてみると木々の隙間から町？村？が見えてきた。

「おっ！！人&建物発見〜」  
「……むっ。」

「第一村人発見〜。すみませ〜ん。」  
中世の村人といったらこんな感じだよな〜。見たいな禿げたおっさんに俺は聞いた。

「ここどこ？」  
おっさんは怪訝な顔をして。  
「はあ？」

もしかして言葉が通じないのか？  
「なあ。言葉通じる？」  
おっさんが息継ぎ無しで聞いてきた。

「あんたら誰だ？」  
「何処から来た？」  
「何者だ？」

「おっ言葉は通じるねえ〜。OKOK〜。」  
「で、ここどこ？先に質問しているのはごっちだぜおっさん」  
おっさんは訝しげにこちらを見ながら  
「ここは、ダンドノの村だよ。」

「ダンドノ村？」  
「ああ、グラサム王国の東のはずれだ。」  
「……はっ？」

「聞こえんのか？」

「いやっ……。」

聞いたことも無い国の名前に俺は少々混乱していた。

少々？いやっダイブ……。

脇を見ると辰巳も怪訝な顔をしている。

聞いたことも無い村で聞いたことも無い国の名前。

そして中世の格好をした人たちが要るこの場所から俺達のたびは始まった。

一章「？」（後書き）

誤字脱字カモーンです。

## 一章（前書き）

さてさて少しづつですが話が始まりますので、  
気長に読んでください。

## 一章〜？〜

俺達がダンドノ村についてからすでに3か月が過ぎていた。

この世界では、まれに異世界人が現れるらしい。

・・・本当か？

まあ考えてもしょうがないな。

まれといっても、うわさレベルではなく伝説級らしい。

・・・まれっていつのか？

そんなわけで、俺達は最初に声をかけたのが村長だったらしく、異世界人なのにも関わらず、三ヶ月の間に色々ありまして。

現在、俺達は村長の家に間借りさせてもらっている。

現在の辰巳は、村の女達から熱い目で見られ、男達からは頼りにされている。

一方、俺はと言つと・・・。

子供には好かれている。女ではなくおばちゃんたちには好かれている。

全然嬉しくねえ・・・。

やはり顔か？顔なのか？顔で選んでいるのか？おおおい！！

双子だから顔のつくりは似ているはずなんだぞ？

そんなくだらないことを考えていると、子供の一人から声をかけられた。

「ね〜貴一。今日のおやつは何〜?」

「ん〜?おっ、メリじゃないか。今日はどうした?」

声をかけられた方向を見ると赤みがかった髪の毛茶色の目そして、元気いっぱいの笑顔を貼りつかせた。かわいい女の子がいた。

「だから〜。今日のおやつは何なの!」

「今日のおやつは、果物のタルトに、クッキーかな?そうだな・・・後は・・・。」

「いつ食べれる?」

「ん〜あと、少してクッキーが焼けるからそしたらだな。」

「私も食べていいんだよね?」

「はあ?メリはきのう食べただろ?今日は売り物にするからダメ〜。」

「ケチンボ。」

「・・・むっ、味見くらいはさせてやる気だったが。そんな言葉使いでは、あげられんのう。」

「ほんとに？味見させてくれるの？言葉使いなおすから味見させて  
！！」

「あ〜じ〜み！！させて！！」

「しょうがねえな、そこにタルトがあるからそこから好きなもの2  
個選びな。」

「2個もいいの？本当に？」

「おうっ。今回は自信作だぞ！！」

「貴一が作ったのはなんでもおいしいから。大丈夫！！あたし分か  
つてる！！」

「おっ、嬉しい事言うねえ。それじゃあクッキー焼けたら家に持ち  
帰りな、家で夜のおやつにでもしな。」

「ありがとう、貴一いつもやさしいから大好き！！！！」  
メリはそう言つと俺の首筋に抱きついてきた。子供と特有の暖かさ  
に癒されながらここ三ヶ月の事を思い出していた。

~~~~~三ヶ月前~~~~~

俺と辰巳は村について、村人に話しかけて場所聞いて…………。

なのに何故縛られているんだ？建物内に閉じ込められているのは理
解しているのだが。

「むっ……。」

「なあ、辰巳なんでだ？」

「分からん。」

「だよな。話しかけて場所聞いた瞬間から記憶がねえ。」

「……。」

「……冗談だよ。意識はあったが気絶の振りしねえと、めんどくさいことになりそうだからな、お前もそうだろう？」

「……むう。」

そうなのだ、第一村人と話をしていた時に後ろから俺達は殴られた。多分、木かなにかで殴られたんだろうが、俺達はそんなに気絶はしない。

だてに体を鍛えていない。

だって、両親に死ぬ一歩手前まで殴られたり、冬の熊に追いかけて殴られたりしたからな。。

やばい！！思い出したら素で泣けてきた。

そんな思い出したくも無い事を思い出していると、

扉が開く音がして、光が差し込んできた。そこには第一村人&その他大勢がいた。

第一村人が口を開いた。

「お前らは何じゃ？」

「はあ？何じゃときかれても。俺は神塚貴一だ、そっち仏頂面の男は弟の辰巳だ。」

「以上だが……。質問の返答はこれでいいかい、おっさん？」

「……ほうかほうか。おぬしは貴一と言うのか。」

「そしたら、何処から来たんじゃ？あの森は王国の中でも割と危険な森じゃ。あの森からおぬしらの様な若者が、おいそれとは入れる森ではないんじゃよ。」

「ふ~~~~ん。んで？」

「だから、何処から来たんじゃ？」

「ん~~~~。おっさん、俺が今から話すことは荒唐無稽かもしれん。信じてくれなくてもかまわん。だから、最後まで話しを聞けよ？」

その瞬間、俺と辰巳は縄をひきちぎって胡坐をかいた。

おっさんは軽く目を見開いただけだったが、その他大勢は俺達を見てかなりあせっていた。

まあ、そうだろう。

縛っていて危害なんて加える方だと思っていたのがいきなり立場が同じになったんだからな。

そのまま逃げ出してもいいんだが、現状把握をしたい俺達は、話し合いをしようと思った。

普通なら問答無用で、ボコボコにしてしまっただがなあ……。

「皆の者、静かにせんか!!!」

おっさんは俺の鼓膜がやぶれんじやないかと言う怒号でその他大勢を黙らした。

「ひょくく。おっさんカツコイイな。」

「まっ、おぬしらは悪いやつらではなさそうだから取りあえず聞くかのう?」

「おっさん、話分かるな。」

にやりと笑う俺に。仏頂面の辰巳がうなずく。

「俺と辰巳は気がついたら、あそこの森にいた。それだけなんだが、流れを説明しないと分からんよなくくあ。」

「俺と辰巳は、稽古中……。修行中といったほうが分かりやすいか?その時は滝上で修行中で、修行中に地震があつてその瞬間足元の地面が崩れたなく、と思つたらここにいた。」

「これが大まかな流れかなあ……。理解したかい?おっさん。」

「……………」

「……………言つておくけど冗談じゃないぜ?妄想でもないぜ?」

妄想で真剣にこんなことを話したら。黄色い救急車呼ばれてもおかしくないのは重々承知しているのだから……………。

「……………そうか。大変じゃたな。」

「しばらくは、この村で暮らすとよい。」

「・・・・・・・・・・はあ？」

「・・・・・・・・・・信じるのかよ？おっさん。」

「冗談なんか？」

「冗談ではないけどよ・・・・・・・・。」

「それでは問題なかるう。少々ここでまっとね。こいつらと話し合
いをしてくる。」

「そういうと、おっさんはその他大勢を連れて部屋をでて行ってしま
った。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「なあ、辰巳よお。どう思う？」

「皆目検討もつかん。」

「だよなあ。荒唐無稽な話信じちゃったよ。あのおっさん。」

「30分もたったあとだろうか？」

「おっさんが一人で入ってきて。話し始めた。」

「この国には、異世界人がまれに来るんだ。」

「・・・・・・・・・・はあ？」

「はあ？ではない。異世界人はこの国にまれに迷い込んでくるんだ。
何故かはわからんがね。」

「・・・・・・・・・・おっさん頭大丈夫か？」

「・・・・・・・・・・。」

「じょうだんだよ、おっさん。俺は場を和ませようと・・・。」
「ごめなさい。」

「・・・話を続けるぞ。異世界人んと分かったのは来ている服や言動からだ。」

「以前、この村にきた異世界人も同じような服を着ていたそうだ。」
「着ていた？」

「そうじゃ、その者はわしのひいじいさんが若いころ迷い込んできたらしい。」
「・・・。」

俺と辰巳は稽古中からずっと着物を着ている。今現在もそうだ。現代着物を着ているなんて珍しいんだが・・・。目の前の異世界人のおっさんはしついていると言う。なぜか言いよの無い違和感を俺は感じていた。

「そのものは森から来たときは瀕死だったそうじゃ。」
「瀕死？」

「そう、来ている服も、刃物で切られたような後が沢山見られたそうな。」

その後、おっさんは延々としゃべり始めた。

~~~~~30分後~~~~~  
「 となったんじゃ・・・。」

~~~~~1時間後~~~~~  
「・・・聞こえとるか？」
「・・・おう。」

~~~~~2時間後~~~~~  
「・・・で現在に至るんじゃ。理解できたかな？」  
俺は眠さで頭がふらふらになりながらも聞いていた。

「つまりは、100年前だか200年前だかにも異世界人がいたのだな？」

「そしてそいつは直ぐ死亡して、この国ではないいでたちと立ち振る舞いで、最初は分からなかったがよくよく調べてみると異世界人だった、ちゃんちゃんだろ？」

「……だいぶまとめたが。おおむねそんなところだ。」

「さてとそろそろ自己紹介でもするかのう。わしの名は、キリガ「ラ・サーズと言つ。」

「この村の村長をしておる。」

「村長か……。偉いんだな。」

俺達は両親から礼には礼を尽くせと仕込まれているので俺らも正式に名乗った。

「俺の名は、神塚貴一だ。年は21歳。よろしく頼みます。」

「俺は、双子の弟で神塚辰巳と申します。以後お見知りおきを。」  
おっさんは柔和な顔をうかべると。

「親御さんの、しつけの行き届いた子供じゃなあ、よいよい。」  
と微笑んでくれた。

「それでは暫くは、わしの家で暮らすが良い。この国についてもこの世界についてもおいおい説明していくとしよう。」

その物言いは俺達に対する暖かさがあった。

それに対して俺は礼を尽くした。

「キリガ「ラ・サーズ様、これから大変なご迷惑をおかけすると思いますが、何卒、よろしくお願いいたします。」

「そんなかたくるしい挨拶はいらんわい。それにわしのことはキリガでええよ。」

「……………ん……………」

「……………むつううう。」

俺と辰巳はひとしきりうめいた後。

「よろしくな、キリガのおっさん。」

「キリガ殿、世話になります。」

そんなことから1ヶ月たってこの国、この世界のことがかつてきた。

この世界は1つの大陸4つの国からなっていて。俺達がいる場所は東の国となるらしいが、詳しい地図などは無いため良く分からないのが現状だ。

貨幣は金貨・銀貨・銅貨・紙幣（羊皮紙）からなり。通貨単位はE<sup>エル</sup>と言っらしい。

ん、国は王政をしいていて、街には貴族何ぞがいるらしい。

文字は意味は分かるのだが書けない。俺達は日本語で話しているんだろうか？

んで、ものすごく聞きたいことがあったので、キリガのおっさんに聞いてみた。

「なあつ。キリガのおっさん。聞きたいことがあるんだが良いか？」

「何じゃ改まって？」

「この世界には魔法なんかあるのか？」

「ほっ？魔法？」

「そつだよ魔法だよ。」

「魔法はあることはあるが……。」





一章？？（後書き）

書いてみたのはいいのですが、話が始まらないですw  
次回はきつと！！！！

誤字脱字力モーンです。

一章　　〳〵

その日は寝起きから首筋がチリチリしていた。  
そんな日はいつも何かが起こるような気がする。

俺達が朝起きてきた時には村が騒然としていた。

キリガのおっさん達は険しい顔をしていた。

「どうしたんだ？キリガのおっさん。」

「……。貴一か？」

「……。魔物がでた。」

「……。は？魔物？」

「……。そうじゃ。ここのところいなかったんだがのう。」

「……。で？どうなっているんだ？」

「村人が2人死んだ、村の若い衆だ。街まで出稼ぎに出ているはずの若者だ。」

キリガのおっさんは涙は見せていないが。心では涙を流しているのが俺達には痛いほどわかった。

「……。そうか。キリガのおっさん。魔物はどんなやつだ？」

「オークと呼ばれる。魔物じゃ、人間並みに知能が高く群れで行動するんじゃ。」

「ふうん、そうかそうか、辰巳行くぞ。」  
「…………おう。」

そう言うと俺達は、刀を持って森の方へ歩こうとするとキリガのおっさんが不思議そうに聞いてきた。

「行くって何処に行くんじや？」

「決まってるだろう？オーク退治 だよ。」

「パッと片付けてくるからよ。ちよっくら待っててくれよなキリガのおっさん。」

「貴一よ、一つ聞くんが、オークの居場所は分かるのか？姿は分かるのか？」

「なんとかなるだろう？なあ辰巳？」

「…………大丈夫だ。キリガ殿。」

「まっそういうことだから。安心してまっな。」

そう言うと俺達は、森へ駆け出した。

後ろでキリガのおっさんが何か騒いでいるがウザイので気にしないでおく…………。

「…………辰巳。」

「…………了解した。」

森へ入った瞬間、辰巳と俺は気配を探り始めた。

そうそういい忘れたことが一つ。

神想貴伝流は呪術的な意味合いも持つ流派である。

呪術といっても神道に通じるものであるが。気配の察知など「万物の気」を使った技などがある。

俺達が行っているのもその一つで。万物の気を読み気配を読み気配を探る。

しかし、この技も万能ではなく新しい土地などでは使えないのが、難点である。

だって……いきなり知らない土地で何かしろって言う方が無理だろう？

簡単に言うと気脈を読むのが難しい。万物の気は何処へいっても似通っているから、周囲1kmくらいだったら万物の気で読めるが、それ以上となると気脈を使わないと読めないなんだなこれが……。

と言うことで俺と辰巳は気配を探り始た。

そうすると10kmほど離れたところだろうか？何か妙な気の集団がいるような感じがする。  
普通の獣ではない気配だ。

「辰巳!!」

「おう!!」

辰巳も同じく感じたらしく、俺達はそこへ目指して走り出した。

5分ほど走っただろうか？

その集団は見えてきた。

「辰巳……アレかな？」

「高確率でそうだろう。」

見た感じ、猪と熊と豚を足しで2で割って二足歩行にした感じの生き物の集団が何かをしゃべりながら歩いていた。ちなみにアーマーみたいな皮のよろいに石斧を持ちながら歩いていた。

「・・・ニンゲンメ、マタフエテオッタ。」

「フェルトヤツカイダカラ、アノムラモヤキハラツテ、オレラノムラニスルカ。」

「ガハハハハ、ソレハイイナ」

そんな知能がおっそろしく低いお話をしていた。雑魚戦闘員みたいな会話だよ・・・。

「辰巳、そろそろいくか？」

「むっ・・・。」

この集団以外の集団はいなさそうで、ちゃっちやと片をつけるために俺達は刀を抜きオークへ後ろから切りかかった。

「先手必勝!!!」

・・・が。普通だったら。

アニメとかだったら、ここでかつこよくスバツと切れそうなんだが・・・。

切りかかった瞬間、ガキンと硬質的な音がして、俺達の刀はオークの皮膚でとまっていた。

「・・・まじかよ。」

切りにくい事はあっても切れないことは無いと思っていたんだが・・・。

それはものすごく、あま〜〜〜〜い考えだったようだ。考えてみれば、ここは異世界なんだよな〜。

んでも、ピグムという猪と豚の中間みたいな野生動物は切れたんだがなあ。

そんなことを考えながら、俺達は刀を構えなおした。

そのとき初めてオーク共は俺達に気がついたようだ。

「ン？ナンジャオマエラハ？ニンゲンゴトキガフクシュウカ？」

オークはニヤニヤしながら俺達の方をみていた。

その顔？面？を見た瞬間、俺の中で何かがチロリと燃えた。

ん〜。ムカツイタナアマジデ。

「辰巳〜。ちと、今回はめんどくさそうだから。一気に片付けていい？」

「・・・むっ。了解した。」

そういうと辰巳は俺から離れていった。

俺の考えていることが分かったらしく、直ぐに行動してくれた。

さっすがは、双子の〜辰巳〜

お互いの考えているのがわかって言うのはこういう時はすばらしいと思っちゃうよ。

「さてっと、めんどくさいから5分で終わらすぞ？」

「ハハハ！！ナニカワメイテイルゾニンゲンノオスガ！！」

「人鎖顕現・・・開放・・・」

その瞬間目の前にいたオークの一匹は血煙となって消えた。

一章く？く（後書き）

戦闘シーンは難しいです。

書いてみたのはいいのですが、話が始まらないですw  
次回は改めて戦闘シーンきつと！！！！

誤字脱字カモーンです。

## 一章く？く

最近思う。

なんとなくだが、力を解放したいと思っていた。

ストレスがたまっていた？

そんなもんじゃない。

なぜかこの世界に来て力が有り余っている。

本当に何故だか分からないが。

そして、その力を使えるときがきた。

「人鎖顕現……開放……」

それと同時に硬質的な音になる。

俺の内に意識を向けてその中にある。鎖の一本をちぎるイメージをする。

その瞬間俺の中から風が吹くそれはまだ優しい風だ。

そして俺はその風を目の前のオークにぶつけた。

「あゝあ、久々に解放したから加減がわからねえなあ。加減がわからねえから全力で行くぞ？あーゆーOK？」

「ホザケ！！ニンゲンガ！！！！」

「そうか……。O・Kだな？」

その瞬間俺は人間と言う楔から解き放たれた。

刀を俺は握りなおし。目の前のオーク共に切りかかる。さつきとは違い、手ごたえが無く切れる。

その感触に俺は背筋がゾクゾクする。

また、その感触に俺は酔いしれ、オークを細切りにしていた。

俺は目の前にいるオーク共を、ただただ、蹂躪しつくし捻り潰した。そのまま、十数度同じ事を繰り返した。

何度も繰り返すうちに俺は冷静さを取り戻していた。

血溜まりの中に立っていて、体中は返り血にまみれ赤黒くなっていた。息は切れていない。

このまま何も面白くも無く終わるかと思いきや、目の前に一際大きい四本牙のオークがいた。

普通のオークの倍はあるかと思う体格は近くで見ると圧巻ですらある。

「大きいが……。的はその分でかい。いい感じだ。お前は直ぐにやられるなよ?」

おれは予想外の敵に心躍っていた、現実世界では力の解放なんてできなかつたがここではできる。

まだまだこのような敵がいるのならこの世界はいい感じだ!すごくイイ!

それを考えただけでも頭がいつちまいそうになる。

冷静だった頭がまた、たぎってくる。

しかし、実際にはたぎらなかつた。

このオークも体がでかいだけで、てんで話にならない。張りぼてだ。

そんな事を考えている内にめんどくさくなり。

俺は一気に片をつけることにした。

「「神想貴伝流」」

「「奥伝 壱式 鬼泣き」」

キキキキキと鬼が泣く様な不気味な音が広がった

その瞬間、目の前のオークは首から上を残し存在が消えた

オークはまだ息がある。

「お前は人か？人なのか？」

他の個体よりも言葉が流暢だ。

「はあ？当たり前だろうが、やはりおまえら知能が低すぎだ。」

「ただの人が俺を殺すなどあるのか？」

「あるからお前は死ぬんだろ？そうそう聞きたい事がひとつお前以外にこの周辺に魔物はいるか？」

「まあ良いわ、俺もしぬまえにいろいろと楽しめた。この近くに魔物はおらん。俺達オークが来た時にはな、俺達以上のはいないが、」

そう言うとオークは事切れた。

「キヤーキヤー」

黄色い声が聞こえてきた。

「ん？ん？」

その声をさがして廻りを見渡すと金髪のまさにおねえさんみたいな人が犬？に襲われていた。

犬と言うのか？見た目だけはだが。近くに行くと本当にでかい！！

足だけでも俺の背丈ぐらいあるが……。

金髪のおねえさんを守ろうとして。犬との間に入った。

瞬間、……べちゃり……と俺は舐められた。

「クサッ。」

俺はあとさずりしたが犬は？追いつき俺を押さえ付けて舐めまわしはじめた。

尻尾はちぎれんばかりにふっっている。

そんな事をしていて

辰巳がゆっくりと近づいてきた。

「何をやっているんだ？」

「しらねえ!!!いきなしだ!!!いいから助ける!!!つくか犬どけ!」

そういうと犬はどいた。

「おっ?」

犬は素直に俺からどいた。

そのあと俺はお姉さんが気になって俺はお姉さんのところへ行つた。

おねえさんは、近づくと俺が近づくと

「寄らないで!!!」

さすがに俺の格好を見て、後さずりをしていた。

「ん〜。辰巳いいか？」

「・・・たしかになあ。俺はひどい格好してるわ。血まみれだもんよ。」

「何なのあなた達は？」

「私達は、ダンドノ村から来たものだ。怪しいものではない。悲鳴が聞こえたから。こちらへ赴いた。」

「怪我はないか？」

仏頂面で辰巳は聞いていた。

「はっ・・・。はい!!!」

おねえさんは顔を赤らめて返事をしていた。

「……あつ」

立った！！フラグがたったよ？辰巳！！

「そうか、良かった。」

そういうと辰巳は笑顔を見せた。

さらにおねえさんの顔はトマトよりも赤くなっていた。

こういうとき辰巳はフラグを立てる。相手の性別関係なくだ。

仏頂面で愛想も無いが、人と話すときたまにごく稀にだが笑顔を見せる。そんなとき、女は一度で恋に落ちる。

そんな辰巳を横目に俺は犬に向かい合って見ていた。

体毛は黒か……。

んで瞳は赤か……。

……オスカ。

辰巳とおねえさんは色々と話しているが自分には関係の無い話なん  
で俺はるくに聞いていなかった。

「まあ目的も果たしたし、念のためオークの頭を持って村に帰ろう  
かねえ」

そう思い、犬？を置いてその場を立ち去ろうとした。

「じゃあな！！犬！！……犬？でいいのか解らんが。」  
振り返りオークの頭を探しに行こうとした瞬間

バクッ

「ん？」

気がつく俺は衿元を噛まれ中に浮いていた。

「おわっ！何しやがる！離せ！！」

ドサッ

素直に犬は俺のことを話していた。

「……痛てえ。」

振り向くと俺の頭の中には某ゲームのワンシーンが描き出されていた。

こんな感じだ。

犬？は仲間になりたそうにしている。

YES

OR

NO

犬？が俺を見つめている。

しらんぷりして俺は辰巳に話かけた。

「縄かなんかあるか？」

「ないな、そこの植物の蔦で縛れば問題なかるっ。」

「ん、了解。」

ブチブチと蔦を剥がし、オークの頭を縛っていき、十数頭を結ぶと結構な量になる。

「おもっ……。」

持って。行くとまた……。

ガブリ

その瞬間また浮遊感があり、俺はまた空中にいた。

「おわっ！なんだよお前は」

「懐いているみたいだな。」

「はあ？懐かれても困るわ」

「このままではらちがあかないぞ？」

「しょうがない一旦、村までこいつをつれていくか、こいつがどんな奴かもわからんからなあ」

そついうと横から声が聞こえてきた。

「ちょっと待って！！」

「まだいたの？おねえさん？はやく家に帰った方がいいよ？魔物もここら辺はいなくなつたから……。」

「……いやっ、おねえさんではないな。お前男か？」

「なっ！！なぜわかったの、、、？」

「ん？骨格かな？骨盤が男だからな」

「それにしても、綺麗なへんそうだね。普通はわからんね。」

「そう、あなたいいわすごくいいわあなた私の物になりなさい！！」

「「……………」」

「ごすっ！！」

俺は刀の鞘でおねえさん……。いやっ……。お兄さんか……。

の後頭部をやさしく？叩いた。

「かふっ」

空気が漏れるような音をおにいさんは発して気を失った。

「んん！！よし行くか！！死人に口なし変態に容赦なし！！」

「、、、、ぬう。」

「おい！！一度しか言わないからな！！言葉がわかるなら。犬？俺達を背中に乗せられるか？」

「ばっつ」

と鳴くと伏せの格好になった。

「よし。いけっ」

犬？はすごい勢いで走り出した。  
おにいさんを置いて、、、

いきなりこんな犬？が村に来てもびっくりするだけだと思い。森の入り口で待たせることにした。

村の入口の外には村長達が待っていた。  
みんな武装している。男ばかりだ。

「おっさんオークってこいつらでいいのか？」  
蔓で縛ったオークの頭を俺はキリガのおっさんの前に置いた。

キリガは目を見開いた

「キングオークまでどうやって倒したんだ？」

「いやっ、普通に刀って言うか剣でスバツと」  
キリガのおっさんには珍しく声を荒げていた。

「オークはまだいい、村人でも一匹ぐらいならなんとかなる。それでも一匹だ！！ましてやキングオークなんて熟練した傭兵でも騎士でも一小队は必要だ。」

「ん〜。まあ倒せたからあんまし気にすんな！！キングオークだけ？そいつもここらには魔物はもういないと言っていたし、しばらくは安心だ。」

「人語を理解する固体だったのか？」

「ん？おおっ。普通にしゃべってたぜ？」

「長命个体だったのか？」

そんな話をしていると森から犬？が寂しくなったのかこちらに駆け  
てきた。

「……ブラックドックだ！！！！」

「……急いで門を閉じろ！！」

「えっ？えっ？」

俺は村人が騒いでいるのが、訳がわからなかった……。

村人が騒いで門を閉じようとする間に犬？は俺に追いつがり

一声吼えた。

「バウツ！！」

その瞬間

べちゃりと俺の事をなめ回す犬？

「……ブラックドックが犬みたいに尻尾をふっている？」

「……魔物が懐いている？」

それをみたキリガのおっさんは大きな声で笑い始めた。

「ガハハハ」

「おまえらは面白い実に面白い。そのブラックドックも村に入れ  
てやれ」

「……村長！！！魔物ですよ！！！！」

村人達は悲痛な声を乗せてしゃべっていた。

「危害は加えそうに無いわ」

「いいのか？」

「よいよい」

後から知ったが

犬はブラックドックと言う魔物らしい。

普段は群れで行動するらしいが、って事は犬より狼にちかいのか？

犬？は何故か俺には懐いている。辰巳が触ろうとすると

「ウウウウツ」

と歯を剥き出しにはしないながらも唸った。

初めは誰も近寄らなかったが、

子供達は好奇心に負けたくたく、

徐々に犬？に近づいていき、俺が気づいたときには背中に乗ったり  
と思いきいに遊んでいた。

犬もそれが嬉しいらしく、いつも一緒に遊んでいたが。

されるがままみたいな感じは否めないが……。

畑に魔物がでたときに真っ先に犬？が追い払った。

俺達が魔物を察知する前に犬？は赴き追い払っていた。

また、畑を開墾する時には、切り株や岩などを掘り起こし手伝いも  
自分で行っていた。

そんなこんなで……。

村人からも徐々にではあるが、慣れていき、一ヶ月も過ぎるころに

は村の一員になるぐらいだった。

異世界人でよそ者の俺達よりも気に入られていた。

「微妙に居場所ねえ……。」

「……おう。」

俺と辰巳は森の入り口で軽く鬱になりかけていた。

一章〱〱 (前書き)

ん、話がまた停滞はじめました。

書くのは難しいです。

。誤字脱字及び今回は話と言つか閑話？みたいなものですんで……

一章く？く

オークの事件から

たいした事件もなくぶつちやけ暇だった。

しかも、犬？のせいで……。

「微妙に居場所がねえ」

「……むっ。」

辰巳も居場所が無いのか俺と一緒に日課の瞑想をしている。

そんな事を部屋で考えているとキリガのおっさんが入って来た。

「貴一と……。辰巳もいるか……。お前達旅にでろ」

「はあ？いきなり訳のわからない事言ってるんだ？俺達はやはり邪魔か？」

「そうではないわ、お前達自分の世界に帰りたくはないのか？旅をすれば見つかるかもしれん」

「ん〜、そういう事ね〜。自分の世界に帰りたいのは山々なんだがここにいるのもよいか？とはおもっんだ。ここに居る皆がよくしてくれるから半分忘れていたよ。」

俺は笑いながら言葉を交わした。

「ハハハ、そいつは違う。この世界では、よそ者が村人に金品を奪われて死ぬなんてよくあることさ、だがお前達は悪意がない、なぜだがわからないが人を安心させる」

「それに、キングオークを倒す程の奴がこんな村にいていいはずがない。街に出て見聞を拡げろそして、この国、世界を知れ。」

キリガは何故か、諭すように親父が俺達に話すように話をした。

「ん〜。ちと考えさせてくれ。」

「まあいきなりだからな、よく考えるといい。」

「そうそう。今商人とジプシー達がきている。面白い物もあるから見るといい。」

そういわれて、俺達はこの世界でのことはまだまだ分からないので取りあえず、キリガにいわれたとおり。建物の外に出てむらの広場に出た。

良く見ると村人達が集まり、人だかりが出来ており。

なんだか音楽までなっている。

俺達は良く見るために。中心へ進んだ。

人だかりの中心では、妙齡の女性達が音楽に合わせて踊っている。

ぶっちやけ……。

ん〜〜〜。イイイイ！！スンゴク！！

褐色の肌だがどこか気品をまとっているジプシー達に俺はもうっ……。メロメロだ。

ジプシー達を見た瞬間ズキュンときた。

恋に俺は落ちた。

違う違う……。  
俺は恋に落ちたか……。

やがて音楽が終わり、ジプシー達が村人へ声をかけて次回は明日だと告げた。

村人達は、それを聞くと自然と解散していった。  
商人に用事がある村人は広場のあちこちで物々交換や品物を買っている。

俺はそれを横目にジプシー達をじっと見つめていた。  
片づけをしているジプシーから、いつまでも帰らない俺に話けてきた。

「あら？あなたは？帰らないの？」

「いやっ、お姉さん達の踊り見て感動しちゃって。俺踊り大好きなんだー!!」

「本当に？そうなの？」

ジプシーたちはいぶかしむような目で見られた。

「……。うそです。オネエサンたちがあまりにも綺麗なんでお近づきになれたらいいな。なんて下心満載でいました。」

素直な心を俺が話すとジプシー達は笑い出した。

素直な心？モット素直な心ガアルジャネエカ？タトエバ……。  
……悪魔のささやきが聞こえた気が。

イイジャンソンナコトキニスンナ!!

また幻聴が……。

「アハハハ、おなた面白い子ね。本当に面白いわ、興味がわいたわ。あなたの名前は？」

「俺は貴一だ神塚貴一だ。そこにいるのが弟の辰巳、っていつても双子なだけだな。」

「私達は、バーエルのジプシーよ。……名前はおいおいとねでいい？」

「O\K\desu!」

その言葉に俺はなんとも言えず。  
何かをしたくてたまらず、俺は……。

「っしゃあ!!今日は腕を振るうぜ!!辰巳!!あれ持ってい。」

「やるのか？」

「おう!」

「ジプシーの皆さん!!ちと今日はこの後予定がなければ俺の料理をご馳走しよう。」

「いいものを見せてくれた礼です。」

ジプシーは特に予定が無いからと了承してくれた。

俺は持ち前の料理の腕を振るい始めた。

この世界にも麦があり米があった。

米はさすがに日本米とはいかずアジア米見たいな物でありチャーハンには最高のだ。リゾットも捨て難い。

さすがに火はガスとは行かない為、辰巳を使い火を維持して俺は料理し始めた。

その他の食材も、森や畑で取れるものは大体把握してある。

この二ヶ月食材探しにも明け暮れたのがやっと生きてきた感じだ！！

……。ちなみに。食材探しは俺の趣味だ！！

森での修行なんてざらだったから、食材はその場にあるものを使って作る機会も増えたから。

しらない場所での食材集めは半分生きるためのような気がする。

まあそんな話は置いて……。

キリガが騒ぎを聞きつけてきて。辰巳に事の顛末を聞いてきた。

「んで？貴一は何をやるのだ？」

「料理を作る。」

「作れるのか？」

「あいつの腕は半端ではないんです。俺達の世界では一流の料理人にもまけないぐらいなんですよ。」

それを聞くとキリガは目を細めて笑みを作った。

「それは楽しみだ。」

「楽しみにしてて下さい。キリガ殿。私も楽しみですよ」

~~~~~3時間後~~~~~

俺は思い付く限りの創作料理を作った。

この世界での味付けはこの二ヶ月で覚えた。

まあもといた世界とそうかわらない。

どちらかというイタリア料理にちかいかな？

それを俺はアレンジし十数品の料理を作った。

キリガのおっさんの家では狭く、全員は入らないので。

ジプシー達の机も借りて外に並べてある。

目の前に並ぶ料理の数々を見てキリガやジプシー達は目を見張っていた。

「凄いな。」

「美味そうね。」

「よしっ!!さあ食ってくれ!!」

「「いただきます!!」」

「.....」

「あれ？」

予想外に誰もしゃべらず黙々と食べている。
カチャカチャと食器の音だけが鳴っている。

「なあ……。辰巳美味いか？」

「むう？いつも通りだな。美味しい。」

「……………。誰もうんともすんとも言わないんだが、口に合わなかったのか？」

もしかして、こちらの料理ではまずいのか？そんな事を考えながら俺はキリガたちに質問した。

「なあ、キリガのおっさん、美味いか？ジプシーさんたちはどうだい？」

「んん？おおっ、悪いなあまりにも美味いんで言葉に困ったよ」

とキリガのおっさんは言いにくそうに話し出した。

ジプシーも徐々に話しはじめた。

「いやっ……。おいしいのだけれど、どう言葉にだしたらいいのかわからなくて。」

「そうなの？よかったまずかったのかと思ってびっくりしたよ」

「……それはない」「わ」「」

食事をしている皆から一斉に声が上がった。

「そっかよかった。」

その言葉を聞けて俺は心底ほっとした。

ガチでほっとしたよお・・・。

しかしおれは楽しく食べ、おいしそうに食べるみんなを見て俺は自然と笑った。

やはり、皆が食べてくれるのはとても良い感じだ。

ジプシー達はそれをみて顔を赤らめていたが俺は気がつかなかった。それを知っていれば口説いたんだが・・・。

「私達は様々な所に旅をしているけど、こんなにもおいしいのははじめてだわ。一流料理店にも入った事もあるけどこの料理はそれ以上だわ。」

ジプシーは料理を口に運びながら話をしてきた。

「うれしいねえ。マジでうれしい。その言葉だけでも作った甲斐があるねえ。」

ジプシーの中の一人がふと気になったらしく辰巳に話しかけていた。

「辰巳は兄弟なんでしょ？いつもこんな料理食べているの？」

「むっ？そうですな。基本はこのように凝った物を作るのはあんまりないが貴一が作るのはまずいと思った事はない」

「へーいいわねえ。おいしいのばかり食べれるのは羨ましいわあ。」

そんな事を話しながら食事も終わりかけの時に俺は取っておきのものをだした。

俺様渾身のデザートだー！！

「果物のパイだ。今日のは自信作だよ〜ん。」

「……何これ？」

「ん？パイっていつて小麦粉の生地の中に果物を煮詰めたものが入ってるんだ。」

「ものは試しですから、食べてみて？」

ジプシーとキリガははじめてみる食べ物に恐る恐るだが、先ほどの食事のせいかあんまり警戒せずに食べてくれたみたいだ。

「……………。すごいすごい」

「美味しい！なにこれ！！」

ジプシー達は甘いお菓子をすごく気に入ってくれたらしく。口々においしいと言ってくれている。

こちらの世界では砂糖は珍しいらしいので。作るのに苦労した。

しかし、そこは異世界……。

木からシロップが染み出しやがった。

いつも通りに辰巳と稽古をしているとき何気なく、気になった木を傷つけてみると、甘い匂いがしたんでそれをなめてみると……。メツチャ甘かった。

砂糖カエデ？とも思ったが、違うようだ。

それを原料にシロップや砂糖を作り、今回のデザートに使用したんだ。

「もっとないの？」

はやくもパイを平らげたジプシーの一人から催促がきた。

「ん〜、ない!!」

「え〜。」

不満の声が上がったが材料が足りなかったので、おかわりは無いのだ……。

「……だけど。クッキーならあるよ?」

「くつきー?」

「うん、俺の国での簡単な焼き菓子だよ。」

「食べてみる?」

「うん!!」

パイの生地が余ったんでちとアレンジしてクッキーまがいのものを俺は作っておいたんだ。

「……これもおいしい。」

クッキーもジプシーのお気に入りになったようだ。

そんなこんなで気がつくとも夜も更けていた。

ジプシーの一人が空を見上げて星空と月を見て……。

「もうこんな夜ね、貴一今日はありがとね、とてもおいしかったわ。

辰巳もありがとう。」

「お礼に、神の加護を……。」

そういうとジプシー達は昼間とは違う幻想的な踊りを始めた。

俺はそれを見て感動して泣いた。辰巳も声を殺して泣いていた。

それは本当に言葉に出来ないぐらいすごいものだった。こっちの世界にきて色々あって、

この村の人たちは本当にいい人で、色々してくれて口では大丈夫、心でも大丈夫だと思っていたが。

魂では負担があつた。魂は大丈夫ではなかつた。心の奥底の本当の芯といえる部分で俺達は疲れていたのかもしれない。異世界と言う恐怖があり自然と俺達は疲れていんだということに、いまここでジプシー達に気がつかされた。

その後のとは良く覚えていない。ジプシー達が涙で汚れた俺達の顔を拭いてくれた事はなんとなく覚えていますが、気がつくとも部屋で寝ていた。

辰巳もなんとなく起きていると感じ話しかけた。

「……………辰巳、旅にでるか。」

「……………そうだな。」

「直ぐとは言わないが、この村人にお礼をしてからだ。返したくても返せないくらいの恩があるが、俺は出来る限りのお礼がしたい。」

「……………そうだな。」

そういつて俺達は旅にでる事に決めた。

つっても恩返しをしてからだか……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3227j/>

双鬼伝

2010年10月11日20時45分発行